

## 会長の時間 ●富田会長

10月に入ってから、漸く暑さも治まり、秋の深まりを感じさせる季節になって参りましたが、残念なことに、マッキナリーRI会長の平和への思いも空しく、中東でまた大きな戦争が始まろうとしています。

先週、圓尾会員の「棕と櫂の話」と題する巨樹と鳥の良いお話を拝聴致しましたが、圓尾会員には、12月に相生で開催されるIMで、「私たちの巨樹と気候風土」をテーマにして、自然と環境について発表して頂く予定をしていますので宜しくお願ひしたいと思います。

自然といえば、揖保川流域や龍野の田園風景などで私が視る限り、最近、秋を黄色に彩る背高泡立草が以前より減少している様になります。数年前、「背高泡立草」と題する芥川賞作品があるように、背高泡立草が日本の自然の原風景となつてから久しいですが、作家五木寛之はエッセイで、再三、背高泡立草とススキの關係を書いており、興味ある見解なのでここに紹介させて頂きたいと思ひます。

背高泡立草は、1970年代からの北米産の外来種であり、一時は、九州から北海道に至るまで、日本古来のススキを駆逐する勢いで日本中に繁茂しました。それは日本から在来種のススキが絶滅するのではないかという程、どこでも黄色い背高泡立草が優勢で、ススキが追いやられていました。

ところが、いつの頃からか、背高泡立草の背丈が低くなると共に、背高泡立草とススキが仲良く共存する現象が出て来ました。まるで、日本的な風土で生き残る為にはこれまでの在来種と敵対關係ではいけないと反省したかの様です。動植物が新しい環境に適応して生存していくことを五木は「馴化」と呼び、背高泡立草が日本に「馴化」してススキと共存共栄していると述べました。今、日本では気候変動も原因し、外来の動植物が到来したり、海外からペットを輸入したりしていることを良く耳にします。共存共栄なら良いのですが、どちらかと云えば環境破壊となっているケースが多いと伝えられています。五木は、背高泡立草とススキから連想して、日本に於ける宗教を考察し、6世紀に渡来して日本に「馴化」した仏教に比べ、16世紀に伝えられたキリスト教は、現代の日本人に受容されているのに未だに日本の人口の1%しか信者がなく、日本に「馴化」しなかったと日本の精神風土について述べています。

五木寛之は背高泡立草について、日本に「馴化」して、ススキと共存していると述べていますが、この秋、気づけば、ススキが至る所で蔓延り、背高泡立草が「馴化」を超えて幾分、劣勢となったかのように感じます。

ロータリーは、1920年に日本で初めてクラブが設立されてから、100年が経過しました。日本のロータリーアンは10万人を超えていたときもありましたが、「友」によれば本年7月末現在で83,605人となっています。会員減少は日本の人口減少の縮図でもあります。これまで、ロータリーは日本で「馴化」し、共存していたように思ひます。ロータリーが背高泡立草の様に退潮とならないようにロータリーが地域社会と共存し、改めて会員拡大とクラブの活性化に努めなければならないと思ひ秋の今日この頃です。